
Magic sword online

赤い人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M a g i c s w o r d o n l i n e

【Nコード】

N 1 4 6 5 Y

【作者名】

赤い人

【あらすじ】

この世界の冒険者は、全て魔術師である。貴方は魔術師となり、この世界を駆け巡り、数々のモンスターを倒し、この世界を貴方が望む生き方を送るだろう。

貴方は右も左もわからぬ生粋の魔術師だ。部屋にこもり、誰にも邪魔されず魔術の神秘を追求しても構わないし、外に出て武術に励み、モンスター達と渡り合うのも貴方次第。人を殺めても、貴方が望むのならそれは仕方ない。しかし、貴方はそれ相応の罪を負うことだろう。

この世界に飽きたのなら、死んでも構わない。ただし、忘れてはならない。死ぬという事はつまり消失と同等であり、死んだあとには何も残らない事を、その身にしっかりと覚えておく事だ。

それでは、この世界で生きる貴方の健闘を祈る。

死にたくないなら、決して死なない努力を怠るな。貴方が強く拒もうとも、死は誰にも平等に訪れるのだから。

序章

少年は自分の状況をどうにか理解しようとした。昨日まで変わらなかった少年の寝室、昨日までであった普遍的な日常、そして昨日までであった少年の記憶……。何もかもが消え失せ、朝起きたらここは屋根裏部屋。フカフカの藁にシーツを敷いただけのベットに少年は寝ていた。外に出た先は一面の草原。向こうには山があるのみ。そう、少年は異世界に飛ばされていたのだ……。！

限りなくファンタジーというジャンルがお似合いの世界。魔法が存在し、王政やらと少年の生きた世界とは常識が全く違うこの世界で、少年はどんな生き方をするのだろうか。

一話

先に言えば、まだ異世界に飛ばされる前の少年はかなり普通の日常を送っていた。普通に起き、普通の食事を食べ、普通に学校に行き、普通に友達がいて、普通に勉強して普通の家に帰って普通に寝て。恐らく、これほどまでに薄っぺらい人生を送っている少年はいないだろう。その事を知ってしまったそいつは、彼に対してひどく同情でもしたのである。このまま、彼の人生を終わらせたくないと思ってしまったのである。だからそいつは、限りなく普通の日常とは程遠い所に移したのである。

ところで、そんな未知体験をした少年は、

「何処だここおおおお!!??」

普通の人ならば当然であろう叫び声を上げた。彼のような普通の日常を送っている人物ならば尚更だ。

「えっちよつとまって? ここマジで何処? 外見ればなんにも無い草原だし、ここだって俺の家じゃないし。てか俺だれー」

とそこで、少年はふと止まる。

自分は一体何者だと。

二話

「……」

少年は只々啞然としていた。以前、もとい昨日までの記憶がなかったのだ。なにも、真っ白に、少年は昨日までの記憶を思い出せなかった。自分が誰なのかだけではない。慕ってくれた友達、自分を産んでくれた両親、そして自分が住んでいた町の風景でさえ、彼の脳髄には一切の記憶がなかったのだ。そして少年にとって何より苦しかったのは、それを認識してしまう己だったのだ。

「……ひっく。おかあさん……」

ついに少年は涙を流し、やがて号泣し、もう顔さえも覚えていない母親の事を思い出そうとしていた。しかし、それは叶わなかったのだった……。

三話

ありったけ泣いた末、なんとか泣き止んだ少年は、ひとまず階段を降りて下の方を見てみた。するとそこには人はいなかったが、台所など少年がここで一人暮らしできそうならいの設備があった。とりあえず少年はここで生活をする事を決意し、ここらにある物を漁ってみた。すると、

「……ええ」

刃渡り6cmほどある両方に刃がある両刃の刃物、つまり長剣を見つけた。そして実はかなりの武器マニアだった少年は、すぐにこの剣の名称を思い出す。

「なんでこんなところに＜ロングソード＞があるんだよ……」

少年は呆れながら言った。＜ロングソード＞とは長剣としては一般的な部類にはいる剣で、西洋では広く使われていた武器の一つだ。その他にも沢山ある。一つは木を鉄で補強した盾だったり、皮の鎧や皮の膝当てや皮でできたバンダナ、最後は皮の小手を見つけた。どうやらこの、少年が飛ばされた異世界はかなりファンタジーな世界であるらしかった。普通家に、このような武器や防具があるはずないのだから。あるとしてもそれは観賞用が普通だろう。しかし、今ここにすぐにでも使えそうな武具が普通に並べられているのが事実だったりする。

とりあえず武器防具を見た事も着た事もなかった少年は、とりあえずそこにあつた装備一式を着てみた。すると、

「あ、ピッタリだ……」

思いのほかあっさりと着れてしまっていた。大きすぎてぶかぶかでもないし、小さすぎて窮屈そうでもなかった。それを思わせないほど彼は着こなせていた。まるですでに何十年間も着ていたかのような馴染み深い感触のように……。

「……」

少年は＜ロングソード＞も握ってみた。やはりかなり馴染んでいた。しかしそれでも、剣術はからつきしただだからなのか（そもそも記憶がないのでそれを確かめようがないが）、振ってみてもあまり様になっていなかった。

「俺って、ここに住んでたのか？」

そうとしか考えられなかった。確かに見る物すべてはじめてだったが、この武具たちを着て馴染んでしまうのだから疑うのも仕方がない。だがしかし、考えてみればさっきの記憶を失ったことを認識していたことを思い出すと、

「……いや、やっぱりここは俺の住んでた場所じゃない」

少年はさっきのことが気になって仕方がなかった。そしてそれがこの結論を導いたのである。

とりあえず、今日一日、およびこの近くのことを書かれてある地図^{ツテ}を見つけるまでここで寝止まって、地図^{ツテ}みたいなものを見つけたらこの馴染んだ武具一式をもってここを立ち去ることを決めた少年だった。

四話

夜。既に空は暗くなり、月や星が照らす暗黒で美しい空となっていた。少年はひとまずカンテラに火をつけ、一階の部屋の辺りを明るくした。

この部屋を漁った結果、地図^{マップ}はおろか多種多様の道具、この世界での貨幣と思わしきコイン、金目の物品などなど、今後生活して行く上で必須とも言えるような物が沢山あった。また食料も豊富にあり、数日は食住には困りそうにない。しかしこは、ここで目覚めたとはいえ他人の家。地図を見つけた以上ここに長居するつもりは少年にはなかった。万が一この家の者が現れた事を考えて、明日の朝にでも出発する気でいたのだ。その為に少年は道具入れ袋に長旅に必要な物をパンパンに入れた。

その前に、少年は地図を広げてこの世界の全体図を見た。有難い事に手書きなのか、この家を中心に書かれていた。

北方角——地図で言う所の真上の方向には、小さながら町があった。他方の方角には町と思われるような物はなかったので、ひとまず少年は明日この方角に行く事を決めた。

そうと言われればあとは睡眠のみ。少年はすぐ出発できるように荷物を屋根裏部屋まで持って行き、フカフカの藁にシーツを敷いただけのベットに横になって眠った。

五話（前書き）

まだ完全に文章を確認したわけではないので、修正する可能性があります。

五話

朝、少年は夜明けとともに起き上がった。これが夢だと信じて覚めてくれると望んでいただろうが、そう甘くはなかったらしい。少年の見た景色は昨日見た景色と一緒に、フカフカの藁にシーツを敷いただけのベットに寝ていて、外を見れば一面は草原しかない。少年はため息をついた。

とりあえず少年は昨日打ち合わせた通り朝食を食べ、武具一式に着替えてすぐにこの家をあとにし出発した。夜明けとともに起き、出発するまでのタイムラグが少なかった為辺りはまだ薄暗かったが、この明るさでも足元がおぼつくので先に進んだ。

目指す場所は北方角にある草原にポツンと立つ町だ。少年はこの世界に来てからまだ一度も人にあつた事がない。町には人が大勢いるはずなので、ここが何処なのかとかを調べてみようと思っていた。この家で一人暮らしをしていた所で、到底何もわからないはずなのだから。

「……ん？」

日が完全に登って数時間。歩き続けていると、少年は人と思われし人影が見えた。それだけではない。馬車も見えて来て、荷台にはたくさんの人々もいた。

有難い。少年は心がはずんだ。こんなにも早く他人に会う事ができたのがそんなにも嬉しかった。

「すみません」

「はい、なんですかな」

馬車に近づき話しかけると、その運転手と思われる白髪の老人が答えた。

「馬車に乗りたいんですけども」

「この馬車はイカーナの町行きじゃ。就くには半日かかるし金もかかる。それでも良いかい？」

老人が答えた言葉は、かなり警告風な感じだった。少年は一応、料金を聞いてみた。

「料金かい？ 10セントじゃ」

10セント……。この世界に生まれてきた訳ではない少年にはどれほどの価値かわからなかった。

とりあえず少年は、カバンから銅貨を10枚取り出し、白髪の老人に差し出した。白髪の老人は少年が差し出した銅貨10枚を受け取り、枚数を数える。すると、

「子供にしては金持ちじゃのう……。よし、乗りなさい」

老人は受け取った銅貨10枚を取り出した財布に入れ、少年を馬車に乗せてくれた。どうやら銅貨はセントというらしい。老人がボソッと言った言葉は気になるが、少年は今は足の疲れを取りたかった。少年は馬車に乗り、ひとまず次なる町の到着まで休む事にした。

六話（前書き）

今のうちにやっておこう登場人物紹介。

少年

名前不明。

主人公。突如記憶を失って異世界に飛ばされた少年。飛ばされる前はまだ世の中を詳しく理解できない中学二年生。実は乙女と見間違えるほどの美少年。普段はちょっと臆病だが、一人だと態度がでかくなる。

六話

老人の言うとおり、少年が乗ってから約半日で目的地『イカーナ』の町の着いた。なのですでに太陽は沈もうとしていた。

ここイカーナの町は、ここ以外の町を知らない少年には比べようもないが案外普通な町だった。店などもそれなりにあり、おそらく冒険に必要な物が準備できないなんてことはないだろう。

ひとまず少年は今日の寝床を確保するため、宿屋に向かった。すると道中、

「君」

と少年は肩を叩かれた。後ろを振り向くと、そこには少年と同じような防具を来ていた男がいた。

「もしかして君、新米冒険者かい？」

「え？」

と言われて、少し迷う。少年はこの世界に来てまだ二日ほどしかない人間だ。ここでの自分の存在価値も知らない少年は、どう答えるか迷っていたのだ。

そして少年が迷っていることに気づいた男は、

「ああ……悪い。どうも私たちと同じ武具を着ていたから、てっきりそうかとは思ったんだが……。悪いね、呼び止めて」

「いえ、すみません……」

思わず少年は謝ってしまった。

「いいんだよ。……そうだ。君、冒険者になってみるかい？」

「え、冒険者？」

思わず訪ねてしまった。

「ああ。どうやら君は人間の様だし、^{ヒューマン}ここの宿屋にあるギルドで登録できる。如何だろう」

『冒険者』。少年はその言葉になぜか胸が躍ってしまった。なぜかその『冒険者』に惹かれてしまった少年だった。

それに、今後のこともある。いつまでも無職では、金の出所がなく金欠になっていくだろう。冒険者なら（命を懸けるであろうが）多少働かなくとも十分一攫千金を狙えるだろう。

「はい、やります」

少年は多少の覚悟の上で冒険者になることを志願した。

「よし、わかった。じゃあこれを持って、宿屋のマチスという男に渡すんだ。その男がギルドの登録を行ってくれる。良いね？」

「わかりました」

男は少年に書類を渡した。内容を見ると、どうやらこの男の招待状らしい。

少年は男と別れを告げた後、すでに辺りは暗く、非常に物騒だった。ひとまず少年は、寝床の確保を含めてすぐに宿屋に向かった。

七話（前書き）

登場人物

マチス

宿屋『イカーナ』のバーテンダーかつ人間ギルドヒューマンの窓口。物静かで少し怖いが、本当は人思いかつ子供好き。

前回登場の冒険者

名前不明。少年・ノブレスを冒険者に誘ったした人物。名のある人らしいが、最近の本職を切り捨て誘いに勤しんでいる。

七話

宿屋『イカーナ』のバーはすごい活気だった。

酒のがぶ飲み・賭け事・その他もろもろ、人々が行き交い混沌と化していた。

とりあえず少年はマチスという男に尋ねるため、バーテンダーの男の元に向かった。

「すみません」

「……なんだ？　ここはまだガキの来るとこじゃないぞ」

バーテンダーの男は物静かにそう言った。少年はその冷たい言葉に一瞬怯えたが、

「あの、えっと……マチスという人はいますか？」

少年は勇気とやらを振り絞って、バーテンダーの男に聞いた。

「……俺がマチスだ。紹介状は？」

「これです」

少年は先ほどの男からもらった彼の招待状を、マチスに渡した。

受け取ったマチスは、招待状を見通して、

「……あの男も必至だな。確かに冒険者の人口は少ないとは言っても、こんなガキまで契約させるのか……？」

と言って、男は半ばキレていたが、仕方なさそうにため息を一つ吐いた。

「おし、ガキ。とりあえずここに歳と名前を書け」

と言って、少年の元に用紙を出した。内容は、ただ単純に年齢・名前としか書いていない。

少年はとりあえず年齢は14、名前は……どうしようか迷っていた。とりあえずピンと思ひ浮かんだ『ノブレス』と言う名前にした。そして少年は用紙をマチスに提示した。

「14歳、ノブレス、か……とりあえずギルドの登録は完了したが、ギルドメンバーには一人一人会員手帳みたいなものを発行するから、

八話（前書き）

金銭

1 セント s e n t 〓 銅貨1枚分

1 ペンス p e n s 〓 銀貨1枚分 〓 銅貨100枚分

1 ブロー b r o 〓 金貨1枚分 〓 銀貨10枚分 〓 銅貨1000枚分

1652 s e n t 〓 1 b r o 6 p e n s 52 s e n t 〓 金貨1枚・
銀貨6枚・銅貨52枚

基本的に金貨は爵位持ちの貴族以外持つことがない。また銀貨は村長が少数持つ程度で、平民は基本銅貨を持っている。

八話

ノブレスは大勢の人々の隙間を潜り抜け、ステージと思われる場所を一望できる地点にたどり着いた。

「さあ皆様！ 今宵最後の商品となります！」

すでに終盤を迎えていた奴隷売買、もとい奴隷オークションは、最後ながら大迫力の歓声が後ろから湧き上がる。そして、ステージ脇から首と手首を拘束具でつながれた豊満とも言うべき乳を持ち、容姿は自分と同じ年ほどの幼さがある素っ裸の少女が現れた。

「今宵最後の商品はこちら！ 半妖^{エルフ}精族の性奴隷でございます！」

ステージに立っていた男がそう告げると、大勢の人々はまた耳障りな大歓声を上げる。対する裸の少女は、曝け出された恥部を必死に隠して泣いていた。

ノブレスは許せなかった。人権の侵害——たとえそれが人間ならざる人であったとしても、意思・人格を持つものをここまで羞恥させて何が楽しいのだろう。ノブレスには理解できなかった。それ以上怒りが込み上げてきた。しかし、ノブレスには何もできるはずがなかった。これだけの人数だ。自分の意思など無意味と化すが当然であるし、強行突破もおそらく不可能。どうしようもなかった。

だがノブレスは、この奴隷オークションだからこそ受け入れられる法則を、一つ知っていた。

「商品もお見せしたところで、オークションの開始と行きましょうか！ それでは、銅貨10枚——10セントからのスタートです！」
いよいよオークションが開始された。まず一人の男が「50セント！」と大声で叫ぶ。しかし次は「75セント」とその額を超える銅貨を言った。しかし次には——の繰り返しである。

やがて金額を言う男どもの姿もいなくなり、最終的な額は銅貨165枚でとどめた。

「これで最後ですか……？ ではこれで——」

「金貨1枚」

その誰かの発言に、大勢の人々が一瞬時が止まったかのように静まり返る。

発言者はステージの前の真ん中に立つ者、ノブレスだった。

この場の静まり返りが、オークションの勝者をノブレスだと決定付けただのだ。

九話（前書き）

新たな登場人物

ナタリア

半妖精^{エルフ}。性奴隷の母親から生まれ、そのまま性奴隷として教育させられた悲運の少女。ノブレスに買われる。

一応低級の魔術を行使できるほどの実力はあるが、半妖精族自体剣を持つものが少ないので、剣術はからっきし。

九話

オークションの後、ノブレスは主催者から商品たる半妖精^{エルフ}を金貨1枚で取引した。その主催者から「まさか貴族がご参加していたとは思いませんでした」と言って、宿屋の二階に戻って行った。ノブレスにはなんの事だかわからなかった。

主催者が教えてくれた事だが、この世界で奴隷とは、いわば各種族の領土で生きている異種族の事を指し、今この世界では異種族同士の睨み合いが激しいらしい。その種類は神に最も近い万能の中立種族・人間^{ヒューマン}。森に生き実体を手に入れた秩序の種族・半妖精^{ドワーフ}。高い技術と信仰心を持つ怪力と秩序の種族・半巨人^{ホビット}。最後に人間と友好的な関係にある手癖の悪い中立の種族・小人である。これが一般的に言われる人々なのだが、魔族と呼ばれる人々として区分される種族とは別にモンスターとして区別される種族も存在する。そして今回ノブレスが買収したのが半妖精のナタリアと言う少女だった。

ノブレスはマチスから部屋の鍵を貰い、早速ナタリアを自分の部屋に連れて行く。勿論身体目当てではなく、この世界の設立について知らなかったノブレスは、唯一の身内である彼女にその事を聞き取ったのが本音だった。おそらく彼女は何かりアクションをするだろうが、聞かなければノブレスにとって今後の方針を決める事が出来ないのだ。

部屋に入ると、さすがは宿屋、かなり清潔で綺麗な場所だった。ベットもフカフカそうだった。

「とりあえず、ベットに座ってて」

とノブレスはナタリアに言った。ナタリアはこくと首を縦に振ると、ベットに座った。

今ナタリアは申し訳程度のボロ布一枚しか着ておらず、半ベソだった。ノブレスは怒りがこみ上げたが、それは彼女に当てるべきで

は無いと悟ると、すぐにその怒りは冷めていった。すると、

「あの……」

ナタリアはノブレスを呼んだ。今日と言う今日の為に私は生かされてるのだと、そう言い聞かせた。

「ん、なに？」

ノブレスが聞く。ナタリアは今までを振り返る。売り物として餌付けされ、性奴隷として教育され、生かされ続けた今日までを。今日からなにが起ころうと、私は受け入れなければならないと。

覚悟を決めたナタリアは、

「……本日はどうも、私をお買い上げありがとうございます。よろしかったら、私のこの淫靡な体を使って頂けませんか？」

と、ナタリアは言い、手を震わせつつもボロ布を剥ぎ取り、自身の肉体を晒した。

ところでノブレスは、いきなり彼女が肉体を晒したことに對し非常に慌てふためいていたが、よくよく考えてみれば彼女は性奴隷。ノブレスはそう考えてくると不思議でもないことを悟ると、急に性欲もろとも冷めてしまった。いや、性欲まで冷めたのはそれだけではなかった。

ノブレスはナタリアの肉体を隅々まで見た。ナタリアにとってその視線が非常に鋭かったのか、非常に羞恥と恐怖を感じていて、心の奥底では疑問に感じていた。

ナタリアは自分でも納得できるほど非常にプロモーション拔群の、半妖精^{エルフ}の中でも美しい肉体を持っていた。肌はシミ一つなかったし、その豊満な胸はたとえ服に包まれていようとも男たちを魅了してしまうだろう。だがこの少年はたしかに急なことに慌てていたが、冷静を取り戻した途端、まるで性欲を全く感じさせなくなっていた。

ナタリアにとって、ノブレスの態度は疑問に思わざるを得なかった。ノブレスはナタリアの体を隅々まで見終わり、呟くかのように彼女に言った。

「……俺って、貧乳で小っちゃい子が好きなんだよね」

ナタリアは聞いて呆れていた。

十話

ナタリアは驚愕していた。

もちろんこの男の性的思考にではない。彼の生きてきた経歴だ。

今までの記憶がない。それだけならばまだわかる。この世界には多種多様のモンスターが数多く存在し、戦闘に不慣れな一般市民が行方不明となって、後日生還することも稀にある。その時今までの記憶のほとんどを失くしてしまう者も、例は少ないとはいえないわけではない。彼の場合もそれにあてはまるだろう。しかし、別の世界の住人で、この世界に迷い込んでしまった。と言う話ならば別だ。そんな話、噂だろうが有名な学者の仮説だろうが聞いたことがない。ナタリアはノブレスの方を見た。別段嘘をついてるような顔をしていない。それどころか、まるで女性のようにも見えるその端正な顔は、真剣さが強く表れ男らしいとも思えた。それでも、ナタリアには信じられない。あまりにも常識から逸脱し過ぎてて、それが本当なのかわからないのだ。

「……そうなんですか」

ナタリアは目の前にいる現在のご主人に、壮絶な過去があること悟ってしまうと、出せそうな言葉も出せず目を逸らしてしまった。だがなぜだろうか。ナタリアはその昔祖母から聞いた事がある様な、そんな心境だった。

「……まあ、あんまり深く考えないでよ。自分でも訳わからない事言ってるつもりだからさ。そんな過去がある程度ぐらいにしろって」

「はあ……」

ナタリアはご主人の気楽さが不思議すぎてたまらなかった。人間ヒューマンと言うものは置かれている状況に慣れてしまう種族だと言われているが、そんな過酷な過去があろうとも慣れてしまうのだろうか。だとすると、その心情がどれほどのものか聞きたい。しかし聞いてはいけないと理性が伝えてくる。それは彼に対する侮辱だと。

「……そろそろ寝ようか」

「……あ、はい！」

結局、ナタリアは彼に答えを問う事が出来なかった。

十一話（前書き）

題名変えました、

十一話

深夜、その月明かりはどれほどその男を苦しめたのだろう。今宵の夜は、ノブレスという名の美少年を酷く苦しめた。

もちろん肉体的な意味など無い。その月明かりは別に彼の身体を傷付ける様な事はしないし、また月は比喩的な意味ではない。何もかもが月の仕業などというでっち上げた。他方から見ればそう見えるだけ。

では一体何が彼を苦しめているのかといえば、おそらくそれは記憶がない事を自覚させてしまっているノブレス自身だろう。親の全て・友達の全て・住んでいた所の全て。全て忘れているのに、なぜかそれがあった事が理解でき、そして忘れてしまった事を自覚できてしまう恐怖。いやそれは恐怖というより愛おしさなのだろうか。

「……おかあさん……」

ノブレスは小言のように呟いた。寝言であり、そこに意識はない。だからこそ無意識に両親とくに母親を思ってしまう、母親の名を思い出そうとしているのだろう。いくら無意味でも、無意識のうちに夢の中でそれを繰り返し返していた。幼そうに見えるが、当然と言えば当然だ。何せ彼はまだ成人にも見たっていない子供で、まだ独り身で生きていくことなどできるはずもない。彼の心はまだ未完成なのだ。そんな彼が独り身という事自体、とんでもなく厳しい状況なのだろう。

そしていつしか、彼のシーツは涙で濡れていたのだった。

そのことを知っていたのは、同じベットの寝ていたナタリアただ一人だった。

最初、突然のことだったのでナタリアもわからなかったが、母親を呼んだことで今までの疑惑は一気に吹っ切れた。やはり奥底では彼は悲しかったに違いない。現に今、名前は読んでいないものの、

ノブレスは涙を流して母親を呼んでいる。

なら自分はどうすればいいのか。主に仕える身として、自分には何ができるのだろうか。等の本人たるナタリアは、すでに答えを出していた。

不意にナタリアは、目の前にいるノブレスを強く抱きしめた。それは、ただ熱く抱きしめる。強く、熱く抱きしめて、彼の孤独な今を温め溶かす。あなたには私がいるのだと、強く主張する行動だった。

もちろん、この行動がノブレスに届くかどうかわからない。しかし、人とは行動しなければ何にもならない。ならば、行動した方がまだ救いがある、希望がある。

そしていつからだろうか、ナタリアがその居心地の良さに眠っていた事。そしてノブレスが、その暖かさで涙を流す事はなくなった事を。

十二話

朝、先に起きたのはナタリアだった。

どうやらナタリアは深く眠っていたようだった。おそらくナタリアは彼を温めたのでは無く温められたのだろう。ナタリア自身、壮絶な過去を持っているのは事実であるし、ナタリア以上に、ノブレスは心優しい少年なのだろうから。

因みに、彼女らは今素っ裸である。

これは別に彼女らが深夜性的行為を行った為では無く、裸で寝る事はこの世界では一般常識であり習慣だからだ。男女問わず美しい裸体を晒さずに寝る事は、恋愛の聖人ティラの教えに反するとナタリアの指摘だった。ノブレスも最初は抵抗を見せていたが、ナタリアが全く譲らない為、仕方なく裸で寝ていた。

その時ナタリアは、彼の裸体に見惚れてしまった。確かに彼の股には男の象徴たる物があるとはいえ、肉体自体は到底男とは呼べない代物だったのだ。

透き通った素肌。男性特有の肩幅が広いとも言えず、それどころか括れがあり、また筋肉質とは言えない身体。もし上半身だけ見ていたら、ナタリアだけでなく、誰もが彼が男性であることを疑うだろう。

ふと、ナタリアはノブレスの顔を見た。自身の豊満な胸によってよく見えなかったが、昨日見た端正でありどう見ても女性のようにしか見えず、しかしあの真剣な眼差しによって男とも見て取れたあの顔と比べて、今の顔は幼き女の子のようであった。

「か、かわいいなあ……」

ナタリアは思わず和んでしまった。これを見て男と思う人物などいるだろうか。いや決していないだろうと、ナタリアは確信した。すると、

「うう……ん……?」

「おはようございます。ご主人さま」

「うん……おはようナタ——」

胸が、胸が見えてるのだ。豊満なるその乳は、ベットのシーツに

（うわ……でか……）

「あ……」

「わ、ちよ、み、見ないでええええええええええ!!」

ナタリアはその反応はまるで女性そのものであると思ったが、そ

その後ノブレスとナタリアは、次の町に向けて支度にとりかかる

問題はナタリアの服装だ。ボロ布とはいえ一応ある程度の肌の露

と、思っていたのだが――

「そのようですね」

今ノブレス達の目の前にあるのは武器屋だった。偶然にも、先に

武器屋を見つけてしまったのだ。

素通りしようとも思った。しかし、ナタリアを戦力にするには武器は必需品と言えた。その為、まずはどちらから行こうかと、この武器屋の前で考えていたのだ。

すると、

「お客さん、何かお探しで？」

武器屋の中から、いかにもいくつかの修羅場を越えてきたような、鋭い目つきの老人が現れ、ノブレス達に向かって聞いてきた。

「はい、実は彼女に持たせる武器と防具を探してまして……」
とノブレスが返答すると、

「なるほど。まあうちは武器を専門に扱ってるので防具は置いてませんが、うちの武器は選り取り見取りですよ。見て行きませんか？」

「はい、是非」

と店内に入ろうとすると、ナタリアが歩み寄って彼にこう注意した。

「……気をつけてください。いくら売り文句が良いとはいえ、たまに粗悪品を高価で売り付ける商売人もいます。できれば武器の購入の際は、自分の勘を信じてください」

「……わかってるけど、今日買うのはナタリアの武器だよ？」

「あ……そうでしたね、すみませんでした」

と言って、ナタリアは少し顔を赤らめて後ろに下がった。

とは言っても、ナタリアの言うとおり粗悪品には本当に注意しなければならぬだろう。場合によっては戦闘中に使い物にならなくなれば、その時点で使い手の死は確定するのだから。

とりあえず警戒して、彼らは店内に入った。

店内と言っても、武具の品々が彼らの入った場所にあるわけではない。あるとすれば、それは効率や扱いやすさについては全く考えられて作られていない観賞用の品物ばかりだ。

「で、お客さんは彼女さんの武器をお探しでしたよね？」

「はい」

とノブレスが答えると、

「半妖精^{エルフ}か……ちよつと待ってください」

と言って、老人は店の中へと消え、しばらくするとあるものを持つて戻ってきた。

「ちよつと特異な品を仕入れてましてね。これなんです……」

その老人が差し出したものは、異様な形をした物だった。

先端と思われる所には小さな穴があり、それ以外に何と表現すれば良からうか、言えることはこれだけでは何の役にも立たないかのような代物だった。少なくとも、ナタリアはこの品物の正体を知らなかったはずだ。そう少なくとも彼女は。

「これって、銃器ですか？」

不意に、ノブレスは老人にこう言った。すると老人は少々驚いたそぶりを見せ、

「いやはや、さすが冒険者ですねえお客さん。この武器を正体を見破られるとは……」

と老人は言い、続けて、

「今までの銃器は、バネを利用し物を撃ち出す物や火薬を爆破させ弾丸を打ち出す物がありますが、これにはそんな物は入りませんいるのは魔力、それだけです。魔力が弾丸となり、撃ち出されるのです！」

と、半ば興奮しながら説明してくれた。

「あの、これ程の物をどこで手に入れたんですか!？」

そして今度はナタリアが目を輝かせながら、老人に聞いてきた。

老人は親切に、

「実は半巨人^{ドワーフ}の有名な銃技師^{ガンズミス}の傑作品でしてね……入手するのには苦労しました」

と説明してくれた。

ナタリアは感動を露わにしていた。もうすでにさっきのような警戒心は薄れていたようだった。

ところでノブレスはと言うと、

(銃器って、この世界にもあるんだ……)

と言う感想を考えていた。実を言うとノブレスは今までの世界の記憶全てを忘れたわけではないのだ。実際は、自分の名前など、家庭や友人関係など、近隣の事だけの記憶を失っただけであって、知識として記憶していた物は全て覚えていたのだ。だから実際に彼はあの異様な形の武器の正体を「銃器」と理解する事ができたし、納得もできた。

「ご、ご主人さま。是非この武器を買いましょう！今買わないと後で後悔すると思うんです！」

と、ナタリアは興奮しながらノブレスにこの異形の武器の購入を求めた。しかし、ノブレスはさっきナタリアに言われた事をよもや忘れた訳ではない。しかし、だからといってナタリアが欲しがっている物を買わないわけにはいかない。武器を欲しがっていることは、その武器でなければ好調の状態を保てないかもしれないからだ。さらに、ナタリアの実力はどれほどの物か知らないとしても、パーティ編成上ナタリアには後衛を担当して貰いたい。なので遠距離の武器は欠かせないのだ。

それに当初、ノブレスはナタリアに弓か何かを持たせようとした。しかし、それよりも高性能の武器があるなら話は早い。

しばらく考えたノブレスは、未だ疑問を持ち得ないのでこう注文した。

「じゃあ、その銃を使って試し撃ちさせてください」

すると、老人は不快な顔も見せず、

「良いですよ？ 品質は確かなので是非試して見てください！」

と返答した。どうやらこの老人が売り物に対する自信の方は確かな様だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1465y/>

Magic sword online

2011年12月13日00時48分発行